

福島とチェルノブイリ／もはや無視できない鳥獣害

# WEDGE 11

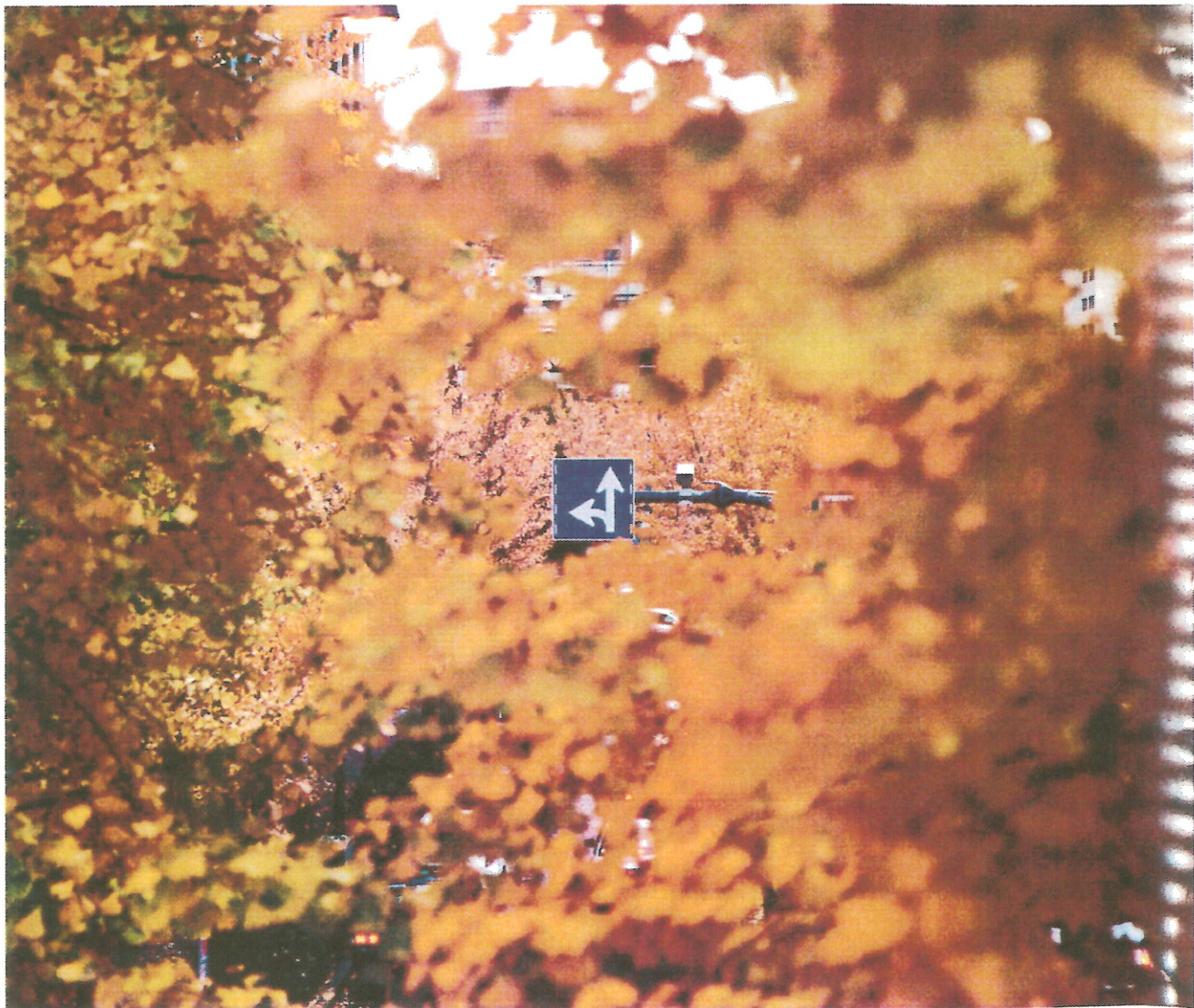
2013 ウェッジ 400yen

## 福島の避難者が見たチェルノブイリ

- 浜通りを「夢の町」スラブチッチにできるか
- 復興を妨げている汚染水「騒動」
- 混乱する原子力諸課題を総合的に解決する

増え続ける鳥獣害 打開策はあるか

リスクも潜む「がん検診」正しい検査の普及急げ



WEDGE

ウェッジ

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町一丁目3番地1

第3種郵便物承認 2013年10月20日発行（毎月1回20日発行）第25巻第11号 発行 株式会社ウェッジ

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町一丁目3番地1  
NBF小川町ビルディング3階 03(5280)0522・営業 03(5280)0525・編集

定価 400円（本体381円）

さらばリーマン 65 溝口 敦

# 月給1万円の障がい者 救うチョコ工房設立

伊藤紀幸さん (一般社団法人「AOH」代表理事)

自分たち夫婦が死んだ後、わが子に生きていてほしいと願うのは当然の親心だろう。まして子どもが障がいを持っていてなら、なおさら強く願わずにはいられないはずだ。

伊藤紀幸さん(48)はそこから一歩踏み出した。それまでの勤めを辞めた上、わが子ばかりか、多くの障がいを持つ人たちに働く場を用意し、自分の稼ぎで食べていける給料を考えると、一般社団法人AOHを立ち上げた。そこを運営主体に去年11月、チョコレート工房「ショコラボ」(横浜市都筑区)を設立、現在18人の障がい者とチョコレートを製造している。

わが子が伊藤さんの目を私生活から社会活動へと転じさせ、広げさせたといえる。文字通り「負うた子に教えられ」たのだ。

伊藤さんは1965年、東京・新宿

の生まれ。板橋で育ち、小学校でリトルリーグに入って以来一貫して野球に親しみ、慶應義塾大学に入っても就活まぎわまで続けた。

## 体重1500グラム 仮死状態で生まれた長男

87年大学を卒業し、三井信託銀行に入った。関西に転動になり、25歳になったばかりで結婚、東京に転動して30歳になったとき、男の子が生まれた。体重1500g、仮死状態だった。ほとんど知的障がいを持つことが分かった。

伊藤さんは銀行で仕事ぶりを評価されていくと自覚していたし、出世競争も面白く感じていた。

33歳のころは融資を担当して土日もなく、帰宅が遅いため子どもの寝顔を見るヒマもなかった。ある日、家にい

◎伊藤紀幸さんプロフィール

三井信託銀行

JCR(日本格付研究所)

ムーディーズ・ジャパン

不動産投資研究所、AOH

るとき、子どもが何か話し掛けてきた。何を言っているのか、まるで理解できず、かといって聞き返すのもためらわれて適当なことを言った。が、まるで見当外れだったらしく、子どもの目が寂しそうなになった。それぐらいは分かった。奥さんは100%、子どもの言うことが理解できる。

伊藤さんは虚を突かれた思いがした。――俺は何をしてるんだ。まるで本末転倒なことをしている――。

当時、藤沢に住んでいた。周りの環境が気に入っていた。子どももいくぶんか育てやすい。伊藤さんは相変わらず仕事に邁進し、社用で連日連夜、午前様だった。奥さんは子育てに悩んでいたが、伊藤さんは気づかず、夫婦仲がギクシャクし出していた。

奥さんは子どもの公園デビューに悩んでいた。よそのお母さんから「ぼく、

いくつ」と聞かれたら、自分が答えるしかない。そのとき子どもの実年齢を素直に答えられない自分が分かっていた。

伊藤さんは奥さんの人知れぬ格闘や悩みを分かっていた。何をしてるんだと聞くと、奥さんは「私たちが死んだ後、この子はどうやって生きていくのか考え出すと、夜も眠れなくなる」と言った。これも衝撃だった。自分はせいぜい数年先のことしか考えていない。が、妻は自分たちの死後のことまで考えている。

銀行で転勤希望を出さないことは出世競争を諦めることを意味した。しかし、伊藤さんはもうこれ以上、転動しないと決めた。勤め先には子どものこ



「ショコラボ」を立ち上げた伊藤紀幸さん(撮影・編集部)

とを話していなかった。話せなかったのだ。が、事実を話して、なぜ自分が転勤を希望できないか、分かっただけならわなければならない。

上司は即、分かってくれた。それは大変だ、本店なら今の住まいから十分通勤できるというて、東京の本店に栄転させてくれた。伊藤さんはこの措置に「人生意気に感じた」。本店の営業は花形である。ここで頑張らなければどこで頑張るとばかりに燃えた。担当は融資とファイナンスだった。99年不動産の証券化も始まった。

しかし銀行の仕事をやっているかぎり、社業と家庭のバランスを取るのには難しい。いい職場で未練はあったが、思い切ってJCR（日本格付研究所）に転職した。アカデミックな雰囲気があり、ほぼ20時には帰宅できた。そういう生活が2年間続き、子どもの言葉が完璧に聞き取れるようになった。

2001年春、子どもが横浜国大附属特別支援学校（養護学校）に入学できることになった。ようやく肩の荷をおろせる気がした。保護者参観日、喜んで出席すると、校長があらかじめ釘を刺すように言った。

「お子さんが高校を出ても就職はできません。たとえ仕事に就けても月給30000円くらい。非常に厳しいのです」

伊藤さんはえーっと思った。自分が残業すると、時給が30000円くらいつく。子どもの月給分をわずか1時間で稼ぐ。世の中、どうなっているんだと感じた。おまけに親は子どもを使ってくれる施設に毎月1万50000円を寄付しなければならぬという。これでは親が死んだら子どもは生きていけない。

01年ムーデイズのアナリストに転じた。自分が働けるうちにできるだけ子どもに財産を残してやろうと思いつつ、自分で売り込んだ転職だった。毎晩2〜3時の帰宅と激務だったが、アナリストとして自らの専門性を高めたいという希望も十分満たされた。

02年、満員の通勤電車の中、日経新聞でヤマト運輸・小倉昌男元会長の「私の履歴書」を読んだ。小倉氏は95年に会長を退任後、個人資産のほぼ全額を寄付してヤマト福祉財団を始め、理事長として障がい者が自立して働く事業所づくりに取り組んだと知った。

障がい者が適正な収入を得られるよう「スワンベーカー」を各地に展開、『福祉を変える経営 障害者の月給1万円からの脱出』という本まで出している。

これにも衝撃を受けた。自分は今まで自分と子どもの利ばかり考えていた。たった一度の人生、障がい者の子ども

を持った以上、広く障がい者を雇用できる会社をつくるのが自分の務めではないのか。

## もんじゃにカレー 悩みぬいた業態

02年9月、勇気を振るってムーデイズを辞めた。が、家計をゆるがせにはできない。10月、横浜に個人事務所を開き、11月、株式会社不動産投資研究所を横浜市中区で設立した。会社を軌道に乗せるまでには時間がかかる。障がい者を雇用するとして、どういう

仕事がいいのか、手探り状態が続いた。08年、もんじゃ焼きを思いついた。バックヤードが要るから、そこにも雇用が生まれる。奥さんを無報酬で専門店で修業に出し、技術やコツを覚えてもらった。しかし、現実には厳しかった。

リーマンショック後、客足が遠のいた。2年前、カレー屋を思いついた。カレー屋ならメニューが少なくすむ。障がい者でもこなせるのではないかと。知人がプロを紹介してくれた。この人は18歳で商売を始め、30年間に18業種を手掛けた。うち3つを上場させた経営のプロである。プロはじつと伊藤さ

んの話を聞き、「ほんとは何でもいんでしよう」と心の内を見透かした。『第3次産業は何をやっても店舗の内装などにお金がかかります。第2次産

業、つまり物をつくった方がいい」とアドバイスしてくれた。

言われてみればその通りと思った。問題は何かをつくるかだった。たまたま奥さんと自由が丘に買い物に行つたとき、奥さんが「チョコレートはどう」と思いついた。夫婦してチョコレートは好きである。幸い有名ショコラティエを紹介してくれる人がいた。会うと、協力を約束してくれた。

こうして去年11月、ショコラボを開業、障がい者12人からスタートした。伊藤さんはツテを頼って百貨店やホテルの販路を開拓し、ネットで通販も始めた。幸い商品は「美味しい」と非常に評判がいい。時間をかけた丁寧な仕事でドライフルーツとのコラボにきているのだ。今のところ年商約4000万円。障がい者には平均1万5000円の月給を払っている。

「雇用を増やし、5年後には全国に展開したい。利益に関係なく、早く5万円、10万円と払いたいものです」と、伊藤さんは言う。ちなみにわが子は「かわいい子には旅」で別の事業所で働いているという。

〔みぞくち・あつし〕ノンフィクション作家、ジャーナリスト。1942年東京都生まれ。主として日本社会の暗部である暴力団や新宗教に焦点をあてて執筆活動続ける。「食肉の帝王」戸富をつかんだ男「浅田満」で第25回講談社ノンフィクション賞受賞。